

修士論文題目 奥州藤原氏と平泉政権―初代清衡・二代基衡を中心に

氏名 劉明達

学生番号 G0219006

修士論文要旨

本論は、古代末期から中世初頭の東北地方で勢力を伸ばした奥州藤原氏を中心に、平泉政権の成立と奥州藤原氏の政治権力の発展について解明するものである。本研究の目的は、主に文献資料を重心に、現存史料の分析・解釈を通じて、つまり平泉政権の基盤である奥六郡の変遷、奥六郡を管理する「奥六郡主」権の形成、奥州藤原氏の権力の源に関する考察、初代清衡・二代基衡の政治動向について明らかにすることである。

第一章 平泉前史

本章は平泉政権の前史にあたる安倍氏・清原氏、さらに律令国家が東北における支配政策を中心に、奥州藤原氏や平泉政権にとって最も重要な権力基盤で奥六郡の形成とそれを管轄する奥六郡主権の成立と発展を論じるものである。九世紀代に、奥六郡の前身にあたる令制五郡が成立した。十世紀初期に、鎮守府の権限が強化され、受領官「鎮守府将軍」が成立された。十世紀初期に、岩手郡が建置され、九世紀代で成立した令制五郡と合わせて、鎮守府将軍管轄下の奥六郡に転身したと考えられる。

十一世紀の初め頃から、鎮守府将軍と陸奥守の間でしばしば対立が生じ、合戦に及ぶこともあった。長元元年、時の鎮守府将軍藤原頼行が帰洛して、以後源頼義の鎮守府将軍任官まで、その除目は行われなかった。鎮守府将軍の職は事実上停廃された。これによって、鎮守府は将軍一在庁一六郡という体制から、在庁一六郡という体制に移行した。その過程で、安倍氏が次第に頭角を現して、ついに長元九年、安倍頼時の父安倍忠良が陸奥権守に任命され、事実上鎮守府のトップとなった。本来鎮守府将軍が掌握した六郡管理権も安倍氏の手に渡った。これが安倍氏の奥六郡主権の来歴である。

第二章 平泉政権の草創と六郡相伝

本章は『吾妻鏡』文治五年九月二十三日条豊前介実俊が奥州藤原氏三代の歴史を語る条分を中心に、平泉政権の六郡相伝の根拠と平泉開府における諸問題を論じる者である。

前九年合戦の後、安倍氏が所有していた奥六郡主権が鎮守府将軍になった清原氏の手に亘った。そして後三年合戦の時、奥六郡主権が義家の介入によって分解され、事実上崩壊した。ただ十二世紀以来、奥六郡の実権を握っているのは奥州藤原氏である。初代清衡が奥六郡主権を復権できるのは、清衡が清原氏の遺跡を継いだからだ。『吾妻鏡』文治五年九月二十三日条の記録では、清衡と同時代の清原氏嫡流の人物は一切見えず、その地位は継父武貞からと主張していた。さらに、豊前介実俊が提示した九十九年の治世年数で逆算すると、後三年合戦終結の直後につながる。つまり、清衡は秀郷流藤原氏でありながら、清原氏嫡流の身分で奥六郡主権と奥六郡を伝領することがわかる。

十二世紀の初めに、清衡は居館を江刺郡豊田館から磐井郡平泉に移した。これは現在に言う「平泉開府」である。しかし、鎮守府と国府の間で、明確な管理範囲が存在していた。しかし

清衡は敢えて奥六郡から南下し、衣川南岸の平泉で居館を構えた。これは清衡の意志のみで動くことではないと考えられる。十世紀末から、中央の文官貴族が鎮守府将軍を兼任することとなった。これは中央朝廷の対東北政策の転換ともみられる。その後鎮守府の重要性が次第になくなった。柳之御所の発掘調査から格式が高い柱状高台が発見され、この地で、格式が高い饗宴が行われたことがわかる。私はこの宴会を鎮守府の饗宴と考え、もてなしの相手は鎮守府将軍を兼帯する陸奥守と考える。つまり、清衡の平泉開府は、個人による居館遷移ではなく、鎮守府の機能の平泉に移したと考える。

第三章 基衡の時代

本章は二代基衡の政治について論じた。基衡の時代は奥州藤原氏の発展の時代である。同時に、対抗と闘争が満ちる時代でもある。基衡の治世の始まりは兄惟常との二子合戦である。この戦の結果、惟常が斬首され、基衡が後継者争いから勝ち抜いた。二子合戦後、基衡の弟に当たる人物清綱が斯波郡で居館を構えた。これは基衡が清綱を平泉の中樞から排除すると見える。基衡の死は急死であることは遺体調査で分かる。史料が乏しいが、『吾妻鏡』の中の豊前介実俊の陳述から、基衡と秀衡の代替わりの時に、おそらく奥六郡で清綱による動乱が発生した。その動乱は鎮圧された。そして事態を完全に収束するために、秀衡は自分の弟を比爪館に送り込んだと考えられ。同時期の京都でも、院近臣・摂関家などにおける権力の軋轢は次第に激しくなっている。この時代の変化の中で、基衡は摂関家と接触を保ちながら、他の政治勢力にも接近し始めた。彼の政治は各勢力と衝突する一方、また、同時の政治情勢を見極めて、各勢力と関係を保ちながら、各政治勢力の軋轢の中に利益最大化を求めると考える。平泉政権は初代清衡・二代基衡の努力で、繁栄の土台を築き、ついに三代秀衡の時代で奥羽両国に広く勢力を伸ばし、朝廷から鎮守府将軍と陸奥守に任じられ、平泉政権の最盛期を迎えたのである。

まとめ

奥州藤原氏の政治権力の源は「奥六郡主」権である。この権力の原型は、鎮守将軍が特別受領となり、鎮守府将軍と転身した際に、令制六郡を改変し、奥六郡となった地域を管理する権力である。十一世紀初期から、鎮守府将軍が一時停廃して、その権力は、鎮守府在庁に渡った。鎮守府在庁である安倍氏は、将軍不在中の功績で、鎮守府在庁筆頭となり、その権力は安倍氏のものとなった。前九年合戦や後三年合戦を経て、「奥六郡主」権が一時崩壊されたが、十一世紀の終わりに、清衡がその権力を継承した。清衡は秀郷流藤原氏軍事貴族でありながら、清原氏の嫡流の立場で、その権力を継承し、治世を始まった。後三年合戦後、文官貴族が陸奥守として鎮守府将軍を兼帯する。これにより、鎮守府の弱体が進み、ついに、藤原基頼の陸奥守兼将軍任中に、南に移されただろう。その移転先は平泉であろう。清衡の平泉開府は、個人による行為ではないと考えられる。

二代基衡の時代は、戦から始まった。又彼の急死によって、新たな不穏を生じたと考えられる。また彼の政治も、闘争と対抗の連続である。その裏には、各勢力と関係を保ちながら、自分自身の利益最大化を求まる算段が窺えるだろう。